

## べっふの未来まちづくり支援補助金活動報告書

<b>1 団体名</b> 想～Cocoro～
<b>2 活動内容</b> 本プロジェクトでは、障がいのある方々への理解促進と、障がいの有無にかかわらず誰もが尊重され共に学び・生活できるインクルーシブな地域社会の形成を目的として、「Disability Awareness Week」の開催および地域イベント「みんなの遊びイチ」への出展を実施した。 Disability Awareness Week では、体験型ワークショップ、映画上映、パネルディスカッション、作品展示を通じて、障がいを多角的に学び理解する機会を創出した。 また地域イベント出展では、障がいを「できないこと」ではなく、人は誰しも得意・不得意を持ち互いに補い合う関係性の中で社会が成り立っているという視点を提示し、障がいのある人も「支えられる側」に限定される存在ではなく「社会に貢献する側」となり得ることを体験的に伝える取組を行った。 当初の予定では7月開催を目指したが、テスト期間と重なり、集客が見込めず、学校側からも開催時期の変更依頼があり1月の開催となった。また、招聘予定の講師が体調不良につき調整がつかず、講師の変更を行った。
<b>3 活動期間</b> 2026 年 1月 12 日から 2026 年 2 月 1 日まで
<b>4 活動実施内容</b> 本プロジェクトでは、学内啓発イベント「Disability Awareness Week」と地域イベント出展を組み合わせて、多様な層への理解促進を図った。 (1) Disability Awareness Week (1/12 (月)～16 (金)：APU 学内) ① バリア体験ペインティングイベント (1/12 (月)：14名) 参加者がアイマスク着用や非利き手使用等の制約を体験しながら創作活動を行い、障がいのある人の感覚や困難さの違いを体感的に理解する機会を提供した。 ② 映画上映会「CODA」(1/15 (木)：7名) 聴覚障がい者の家族をテーマとした映画を上映し、手話やろう文化、コミュニケーションの多様性について学ぶ機会を提供した。 ③ パネルディスカッション「障がいと教育現場」(1/16 (金)：12名) 企業（株式会社三菱商事太陽）、福祉事業者（株式会社United Circle）、学生(想)を登壇者として招き、教育における障がい理解やインクルーシブ教育の課題・可能性について議論した。 ④ 作品展示 (1/12 (月)～1/16 (金)) 株式会社 United Circle に通う障がいのある子どもたちが制作した作品を展示し、個性豊かな表現や創造性を広く紹介した。 (2) みんなの遊びイチ 出展 (2/1 (日) ソルパセオ銀座)

手話サークル、福祉系プロジェクト団体「想」、学生団体ACTと協同により出展を行った。出展名称は「できる側／できない側、やめました」とし、能力の優劣や役割固定の認識を問い直すメッセージを発信した。

① 体験コーナー

Disability Awareness Weekでのバリア体験ペインティングイベントと同様に、視覚・身体・コミュニケーション上の制約を疑似体験するプログラムを実施した。

具体的には、視界制限下での描画、非利き手での作業、音声を用いずジェスチャーや手話のみで指示を受ける体験等を行った。体験後には「どのような支援や工夫があれば助け合えたか」を参加者と対話し、相互理解の視点を促した。

② 障がいのある子どもによる作品販売

株式会社United Circleに通う子どもたちの絵画作品を販売する機会を設けた。「支援として購入する」のではなく、作品として選ばれる経験を重視し、障がいのある子どもが創作者として社会参加する姿を示した。

## 5 活動の成果

Disability Awareness Weekでは、体験・鑑賞・対話・展示を組み合わせることで、参加者が障がいを身近な社会課題として理解する多面的な学習機会を提供できた。

体験イベントでは、見え方や身体的制約による不便さを実感したという声が多く、当事者視点への理解促進に寄与した。

パネルディスカッションでは、企業・福祉・学生の立場から意見が共有され、教育と社会参加における障がい理解の重要性が再認識された。

地域イベント出展では、来場者が疑似体験と対話を通じて「不便さは環境や周囲の関わりで変わる」ことを実感し、障がいを相互補完的な関係性として捉え直す契機を創出し、作品の販売では、来場者が作品の魅力を基準に選択する様子が見られ、障がいのある子どもが社会に価値を提供する主体となり得ることを具体的に示した。

学内イベントと地域イベントを連動して実施したことで、学生だけでなく地域住民にも啓発対象が広がり、インクルーシブな地域意識の醸成に寄与した。

## 6 反省点や今後の目標

本プロジェクトは理解促進に一定の効果を得た一方、参加者との関わりが単発に留まる場合もあり、継続的な学びや交流へつなげる仕組みづくりが課題として挙げられる。

また、体験の意図やメッセージをより明確に伝えるため、説明表示や事前導入の工夫を強化する必要がある。

今後は、地域イベントへの継続出展や教育機関・福祉事業所・企業との連携を深め、障がい理解を体験から協働へ発展させる取組を推進する。

さらに、障がいのある当事者や子どもたちが創作・発信・販売の主体となる機会を拡充し、「支援される存在」から「社会に価値を生み出す存在」への認識転換を地域社会に広げていくことを目指す。